

クリストファー・プリースト（1943-2024） 作品リスト及びブックガイド

（2024年8月24日作成・渡辺英樹）

※編著、別名義作品及びノンフィクションは除く

※●は長篇、▼は短篇集を示す

※タイトル後の「*」は〈夢幻諸島〉ものを示す

※邦訳作品には四百字程度のブックガイドを付した

●Indoctrinaire (1970)

『伝授者』（1980年5月／鈴木博・訳／サンリオSF文庫）

一九七九年、南極大陸の研究所で助手とともに人の精神に作用する薬の研究をしていたウェンティック博士は、突如現れた二人組の男によってブラジルのプラナルト地域に連行される。時間の境界線を歩いて越え、三人は二一八九年の未来へと移行した……。冒頭の展開は非常にスピーディだが、これ以降は、未来の監獄に閉じ込められた博士の不条理な物語が延々と続く。手の生えた机、退路が断たれる迷路、獄舎の壁に生えた人の耳。悪夢のような前半がようやく終わると、舞台は病院へと移り、謎が解かれていく。要は未来の人々が、第三次大戦で使用された化学兵器を博士が開発したのではないかと疑ったのだ。真犯人を探すため過去に戻り、飛行機で南極へ向かう博士。果して過去への旅は成功するのか……。前半部と後半部の齟齬が気になるものの、空間移動による時間旅行、飛行機への偏愛など後の作品への萌芽が見てとれる、才気あふれる長篇第一作である。

●Fugue for a Darkening Island (1972)

●Inverted World (1974) 英国SF協会賞受賞

『逆転世界』（1983年6月／安田均・訳／サンリオSF文庫→1996年5月／創元SF文庫）

七層から成る巨大な要塞都市〈地球市〉は北へ向かって動いていた。移動し続ける最適線に近づくため、人々が十日に一マイルの割合で都市を動かしているのである。この重労働は様々なギルドによって行われ、人々の年齢はマイルによって数えられる。未来測量ギルドの一員となったヘルワード・マンは、生まれて初めて都市の外へ出て思いがけない光景を目にする。球形のはずの太陽が尖った十字型であったのだ。一体世界に何が起きているのか……。結末近くで明かされるこの世界の成り立ちは、まさしく驚天動地のアイデアで、他に類を見ない。本書は、マンの成長物語として楽しめると同時に、認識をめぐる深い考察に満ちた物語となっている。その時々の主観こそが世界の真実であるという考えは、本書以降のプリースト作品を貫く鍵のようなものだ。英国SF協会賞を受賞し、ヒューゴー賞候補ともなって、プリーストの名を一躍高めた傑作である。

▼Real-Time World (1974)

短篇集（十篇収録／二篇邦訳／「逃走」「リアルタイム・ワールド」）

●The Space Machine (1976) デイトマー賞（オーストラリア）受賞

『スペース・マシン』（1978年4月／中村保男・訳／創元SF文庫）

一八九三年、外交員エドワードは、科学者の女性秘書アメリカと知り合いになった。科学者の家を訪ね、タイム・マシンを見せられたエドワードは、アメリカとともにマシンに乗り込み、時間旅行の旅に出る。十年後に到着すると、そこは戦闘の真っ最中。瀕死状態のアメリカ（十年後）を見て動揺したエドワードは、マシンを誤作動させてしまい、何と火星に辿り着く。タイム・マシンは、実は「スペース・マシン」でもあったのだ！ここから二人のロマンスを絡めた冒険行が始まり、五百ページを超える長丁場を一気に読ませていく。物語の終盤、御大ウェルズが登場し、重要な役割を果たすあたりには、作者のウェルズへの深い敬愛が感じられた。

本書は『タイム・マシン』『宇宙戦争』などウェルズ諸作へのオマージュでもある。後に「語りの魔術師」として知られることになる作者には珍しい、ストレートな冒険ものとして記憶すべき貴重な作品であろう。

●A Dream of Wessex (1977) デイトマー賞受賞

『ドリーム・マシン』(1979年7月／中村保男・訳／創元SF文庫)

一九八五年、イギリス南部ドーチェスターの丘砦メイドン・カースルで、秘密裏にウェセックス計画と呼ばれるプロジェクトが進行していた。リドパス神経催眠投射器を使用した数十名の参加者が眠りにつき、百五十年後の未来世界を投射して、その世界の成り立ちを探ろうというのだ。参加者の一人、ジューリア・ストラットンは、投射器に入ったまま二年間も戻ってこないデイヴィッドを探す任務に就くが、別れた昔の恋人ポールが計画に参加することになり、心に動揺を来す。本土と分断されて島となり、観光主体の平和な町であったウェセックスは、ポールの計画参加によって変貌していく……。現実と夢とを等価に描き、ついにはどちらかわからなくなるというプリーストの作風は、本書において確立した。丁寧な風景描写と主人公ジューリアの揺れ動く心理描写が相まって、小説としての完成度も高い。効果的な小道具として鏡が使われている点にも注目だ。

▼An Infinite Summer (1979)

短篇集 (五篇収録／五篇邦訳／「限りなき夏」*「娼婦たち」*「青ざめた逍遥」「否定」*「観察者」*)

●The Affirmation * (1981) デイトマー賞受賞

●The Glamour * (1984) クルト・ラスヴィッツ賞 (ドイツ) 受賞

『魔法』* (1995年12月／古沢嘉通・訳／早川書房→2005年1月／ハヤカワ文庫FT)

フリーの報道カメラマンであるグレイはロンドンでテロに巻き込まれ、重傷を負い、記憶を喪ってしまう。療養生活を送る彼の前にスーザンという女性が現れ、グレイと一緒に暮らしたことがあると言うのだが、どうしても思い出せない。退院後にグレイは彼女と会うようになり、自らの過去を思い出し始める。ところが、それはスーザンの記憶と異なるものだった……。記憶の担い手と物語の主体を絡めたメタフィクショナルな物語を流麗な文体で綴ったラブロマンスであり、香り高い傑作である。薄暗く重々しい英国デヴォン海岸や煌びやかな陽光に彩られたナンシー、ディジョンなど南仏の町々の情景描写と、謎の男ナイオールを巡るグレイとスーザンの心理描写とが相まって、読者を作品世界に引き込み、驚愕のラストまで一気に読ませる。人から見えなくなる不可視能力は、ウェルズ『透明人間』へのオマージュか。作者の腕の冴えを存分に味わえる一冊だ。

●The Quiet Woman (1990)

●The Prestige (1995) 世界幻想文学大賞受賞

『奇術師』(2004年4月／古沢嘉通・訳／ハヤカワ文庫FT)〈SFが読みたい!〉海外篇2位

十九世紀半ばに生まれた二人の奇術師アルフレッド・ホーデンとルパート・エンジャはライバル同士で、技を競い合っていた。しかし、アルフレッドがルパートの降霊術の秘密を暴いたことをきっかけに、二人は互いの奇術公演を激しく妨害するようになる。どちらも瞬間移動を得意技とし、相手の秘密を知りたいと願うあまり、アルフレッドが暴走し事件を起こしてしまう。時は下っておよそ百年後、アルフレッドの曾孫アンドルーが、ルパートの曾孫ケイトと出会い、曾祖父同士の確執を知る。二人の偉大な奇術師の瞬間移動をめぐる謎解きが、子孫の運命と結びつき、意外な展開を辿る。繰り返される双生児のモチーフに、騙りと疑似科学が絡んで、驚愕の結末に至る手腕は実に見事で、世界幻想文学大賞を受賞した。ニコラ・テスラの放電装置が重要な役割を果たしており、クリストファー・ノーランによる本作の映画化『prestige』でもそれは踏襲されて

いる。

●The Extremes (1998) 英国 S F 協会賞受賞

●eXistenZ (1999)

『イグジステンズ』(2000年4月/柳下毅一郎・訳/竹書房文庫)

アンテナ社の開発したヴァーチャルリアリティ・ゲーム「イグジステンズ」の極秘発表会に、開発者のアレグラ・ゲラーがやって来る。ゲームが始まるや、会場に潜入した反ゲーム主義者の男がゲラーに発砲し、大変な騒ぎになる。警備担当のピケルはゲラーとともに脱出し、苦勞の末、ある山小屋に辿り着くが……。カナダの奇才デヴィッド・クローネンバーグ監督の映画をプリーストがノヴェライズした作品。映画は、背中に開いたバイオポートにゲーム機を接続して別世界に入るという基本設定や人間の歯を打ち出す有機的なピストル、突然変異した両生類のグロテスクな姿(食事に出てくる!)など、クローネンバーグらしさに溢れたもので、一見の価値はある。小説は、ほぼシナリオ通りの展開で、台詞が多く読みやすい。パーキー・パット・バーガーなどの小ネタも映画通りだが、確固たる現実など嘘だとピケルが語る場面はプリーストのオリジナルか。

▼The Dream Archipelago * (1999)

短篇集(六篇収録/六篇邦訳/「赤道の時」*「否定」*「娼婦たち」*「火葬」*「奇跡の石塚」*「観察者」*)

●The Separation (2002) 英国 S F 協会賞受賞

『双生児』(2007年4月/古沢嘉通・訳/早川書房→2015年8月/ハヤカワ文庫F T)〈S Fが読みたい!〉海外篇1位

一九九九年、第二次大戦中に良心的兵役拒否者でありながら英空軍爆撃機操縦士であったという J・L・ソウヤーに興味を持った作家の前に、それは父のことかもしれないと話す女性が現れる。父(ジャック)の遺した手記によれば、ソウヤーは一卵性双生児であり、兄弟のイニシャルはどちらも J・L。若き日には共にポート選手として活躍しオリンピックで銅メダルを獲得した二人だったが、ジャックは空軍に入り、兄弟のジョーは結婚し兵役を拒否した。戦争のただ中で双生児の運命は分かれたかと思うと重なり、深く結びついていく……。一人の女性を巡る双生児の葛藤を国家の運命と絡ませて、現実と幻想を交錯させながら描き出し、作者に三度目の英国 S F 協会賞をもたらした傑作である。さらりと読んで虚実が入り混じる独特な感覚を楽しむもよし、入念に読み込んで作者の企みに気づいてニヤリとするもよし。様々なレベルで楽しむことができる作品だ。

▼Ersatz Wines (2008)

短篇集(十二篇収録/初期の未発表作品集)

▼An Infinite Summer (2008)

『限りなき夏』(2008年5月/古沢嘉通・編訳/日本オリジナル短篇集/国書刊行会/八篇収録/「限りなき夏」*「青ざめた逍遥」「逃走」「リアルタイム・ワールド」「赤道の時」*「火葬」*「奇跡の石塚」*「ディスチャージ」*)〈S Fが読みたい!〉海外篇3位

プリーストの魅力は、身近な日常描写から始めて作品世界に読者を引きつけておき、徐々に感覚を揺さぶって、最後には悪夢であると同時に甘美な世界を体験させてくれるところにあると思う。客観的な世界が崩壊するときの眩暈に似た感覚。それは非論理的ではなく、逆に論理を突きつめていった結果、夢か現実かわからなくなってしまうといった理詰め悪夢だ。プリーストがミステリ・ファンにも S F ファンにもアピールする所以であろう。本書は彼の代表作八篇を収めた日本オリジナル短篇集。まずは、タイムトラベルとラブロマンスを絡めた冒頭の二篇「限りなき夏」「青ざめた逍遥」が S F ファンの心を直撃する大傑作。デビュー作他一篇

を間に挟んで、〈夢幻諸島〉もの四篇をまとめて読めるという構成が実にうれしい。中でもホラー風味の「火葬」と究極の騙りが炸裂する「奇蹟の石塚」の二篇は、官能と悪夢が入り混じって出色の出来映えを示す。

●The Islanders * (2011) 英国SF協会賞受賞

『夢幻諸島から』* (2013年8月／古沢嘉通・訳／新☆ハヤカワ・SF・シリーズ) 〈SFが読みたい!〉海外篇1位

プリーストは一九七八年より、架空の星にあるドリーム・アーキペラゴという諸島を舞台にした連作短篇を書き続けている。この星では北大陸に六十ほどの国があるが、戦争が三世紀も続いており、諸島は中立盟約によってこの戦争から守られている。海に浮かぶ数十万の島のうち、名前がついているのは二万ほどだ。本書は、そのうち三十数個の島を、観光ガイドや物語の形でそれぞれ紹介していくという構成をとっている。中でも印象に残るのは、体内に寄生する毒虫が生息するオーブラック島、視点を変えて幾度も語られるパントマイム・アーティスト殺人事件が起きたチェナー島、謎の塔が存在するシーヴル島辺りだろうか。放浪の画家バーサーストら多くの島を訪れた人物たちが、島々を有機的に結びつけている。実在の島かと思ふばかりの緻密な設定、華麗な語り。想像力の限りを尽くした作者渾身の力作で、四度目の英国SF協会賞を受賞した。

●The Adjacent (2013)

『隣接界』(2017年10月／古沢嘉通・訳／新☆ハヤカワ・SF・シリーズ) 〈SFが読みたい!〉海外篇1位

物語の舞台は、イギリスがグレート・ブリテン・イスラム共和国と変化した近未来。写真家のタルボットは、野戦病院で働く看護師の妻とともにトルコ東部に来ていたが、そこで妻が正体不明の爆発に巻き込まれ行方不明となってしまう。大きな三角形の黒く焦げた土だけが後に残され、死体は見つからない。一体何が起きたのか……。次々と登場する謎めいた女性や事件にタルボットは翻弄されるばかり。摂動隣接場というもっともらしい理屈は登場するものの、一向に真相は明らかにならず、沼の底に沈んでいく。しかし、それこそプリーストを読む醍醐味なのだ。近作に登場するモチーフ（奇術、もうひとりの自分、飛行機、近未来的テクノロジー等）を多数詰め込みながら、独自の味わいを持つ重層的な物語に仕立て上げた作者の腕前は見事の一言。ウェルズや『双生児』主人公も顔を出し、まさしく「集大成」と呼ぶにふさわしい作品である。

●The Gradual * (2016)

●An American Stories (2018)

▼Episodes: Short Stories (2019)

短篇集（十一篇収録／六篇邦訳／「青ざめた逍遥」「限りなき夏」*「われ、腸ト師」「落ち逝く」「波瀾万丈の後始末」「エピソードを排除せよ」)

●The Evidence * (2020)

●Expect Me Tomorrow (2022)

●Airside (2023)

▼A Dying Fall and Other Stories (2023)

『落ち逝く』(2023年4月／山本さをり・他訳／日本オリジナル短篇集／ハルコン・SF・シリーズ／三篇収録／「落ち逝く」「波瀾万丈の後始末」「エピソードを排除せよ」)

二〇一九年に刊行された自選短篇集から三篇を選んで訳したもの。二〇二三年にプリーストが「はるこん」のゲストとしてオンライン参加した際に、時期を合わせて刊行された。ファン出版物ではあるが、装幀等は商業出版物と比べて遜色なく、おおむね訳もこなれている。ロンドン在住の男が死を目前にして心に浮かべた風景がベルギーであった謎を解く「落ち逝く」、夏の夜に自宅に帰ると何者かが侵入して本を並び替えていたという恐怖を描いた「波瀾万丈の後始末」、拡張現実ゲームの登場人物が犯した逸脱を排除する役目を担った主人公の苦悩を描き、ゲーム社会の闇を抉り出した「エピソードを排除せよ」の三篇は、いずれも「騙り」を主とした長篇や幻想味豊かな〈夢幻諸島〉ものとは趣が異なるが、読者を引き込まずにはられない独特な語り口が味わえるという点では共通している。二篇目は作者の本棚を実際に眺めているようで非常に興味深い。